

兵庫県立歴史博物館紀要



第 34 号

姫路藩士・下田桂屋と文人画家・浦上春琴 —『桂屋遺稿』にみる文雅の交わり—	山口奈々絵 1
【資料紹介】明治期の広告契約に関する文書	吉原 大志 11
【資料紹介】「城郭巡視日記」(二)	竹内 信 19
【報告】改修工事期間中における博物館資料の保存環境について	山口奈々絵 吉原 大志 30(39)
【活動報告】2021 年度れきはく連続講座 「野里界限まち歩き講座」の実施について	鈴木 敬二 38(31)
【活動報告】博物館における展示情報の提供と博学連携 —“ひょうご五国”歴史文化キャラバン 赤穂会場の取り組みを事例に—	竹内 信 前田 和彦 48(21)
【展覧会記録】巡回展「“ひょうご五国”歴史文化キャラバン」について	香川 雅信 50(19)
大坂仏師「宮内法橋」と 神出仏師「厚木民部・保省」の作例、修理例表の修正	神戸 佳文 68(1)

2023(令和5)年3月

兵庫県立歴史博物館

姫路藩士・下田桂屋と文人画家・浦上春琴

『桂屋遺稿』にみる文雅の交わり―

山口 奈々絵

はじめに

日本画家・日根対山の支援者として知られる里井浮丘（一七九九～一八六六）は、泉佐野の豪商であり、一九世紀を代表する書画収集家のひとりである。^{（註一）}彼の旧蔵品としては、周之夔^{しゅうしき}《溪澗松濤図》（泉屋博古館蔵）が有名で、天保一五年（一八四四）には、浮丘がこの作品を京都の中林竹洞宅に持参し、浦上春琴（一七七九～一八四六）らと鑑賞したことが知られている。^{（註二）}

浮丘が書画を蔵した挾芳園には、岡田半江、小田海儼、貫名海屋、中西耕石、廣瀬旭窓など、著名な文人たちが集った。浮丘が記録した「挾芳園所蔵書画展観例並姓名」（泉佐野市立歴史館いずみさの蔵）は、挾芳園における書画観覧の規則と、天保一三年から元治元年まで（一八四二～六四）の観覧者名を記録している。それによると、挾芳園を訪れた人びとは、初対面であれば紹介が必要、観覧は一日一〇点まで、風雨の日や燈下で飲酒を伴う観覧は禁止、年来往來する者を除いて宿は貸さない、繁忙期の五月から八月と一一月から一月は展観に応じないなど、いくつかの条件のもとで、観覧が許され

たようである。この資料は浮丘が所蔵した書画をどのような人びとが観覧したか、当時の人々の中国絵画へのまなざしを考えるうえで重要である。本稿はそのなかでも、天保一四年三月二九日条の次の記録に注目する。

浦上春琴 名選一号睡庵通称喜一郎 備中人寓京師

宮川春浦 名驥字令徳称駒次郎 京師人春琴門人

下田桂屋 名謙字子牧通称重次郎 播州姫路藩士春琴門人

出淵青山 名效字盈卿通称新八郎 同藩人

三月廿九日同來觀

これによると、天保一四年三月二九日、浦上春琴を含む四人が浮丘の挾芳園に足を運んでいる。浦上春琴は当時を代表する文人画家の一人で、宮川春浦は京都における春琴の門人となる。そして続く下田桂屋は姫路藩士である。出淵青山についても、「同藩（筆者註：姫路藩）人」と記される。

桂屋ら姫路の人々ほどのような経緯で春琴に伴われ、当時における一大書画コレクターのもとを訪れる機会を得たのか。また彼らにとって春琴はどのような存在であったのか。実は、桂屋が遺した詩集によって、この天保一四

年の春琴の浮丘訪問のようすや春琴への思慕がわずかながら明らかになる。本稿では、先行研究に依拠しつつ、浦上春琴と姫路の人々との関係を確認するとともに、桂屋の詩を通じて、姫路の人々と春琴の交流のようすを紹介する。

一 姫路と浦上春琴

浦上春琴は中国絵画についての造詣が深く、日本で初めて文人画論を体系化した『正・続論画史』を刊行するなど、文人としての高い意識を持ち、関西における文人画壇の中心的存在であった。^(註3) 一方で画を売ることと生計を立てる職業画家としての顔も知られている。春琴は日本全国を旅して各地の素封家と交友を結ぶことで、拠点としていた京都だけでなく、全国の人々から制作の注文を受けていたのである。^(註4) 姫路についても、天保九年に来訪し、姫路藩関係者や姫路藩の大庄屋三木家など当地の人びとと親交を結んだ。このことはすでに山崎善弘氏、尾島治氏が詳しく紹介しているが、本章では、先行研究に依りながら、姫路における春琴の活動を再確認する。^(註5) またその過程で、春琴と姫路の文化人たちとの間を取り持った下田桂屋の役割に改めて光を当てたい。

(1) 大庄屋三木家について

姫路藩大庄屋三木家は辻川村（現在の神崎郡福崎町）に居を構え、その住宅は兵庫県指定重要有形文化財として現存する。幕末の当主である五代・通庸（一七五五～一八一）は京都で皆川淇園に、六代・通明（一七八二～一八四四）、七代・通深（一八二四～五七）は大坂・懷徳堂で中井竹山に入門し、

地域文化の発展に貢献した。同家には、歴代の当主が描いた絵画や彼らが収集した文人画を中心とする近世絵画が伝来する。^(註6)

とりわけ、七代目の通深は幼少期より絵画に関心が高く、絵画関係の諸経費を控えた「後素雜費籍」（大庄屋三木家文書）によって、浦上春琴や姫路で活躍した長崎派の画家・島琴陵に絵画を学んだことが知られる。通深は天保二年までに琴陵に絵を習い始めたが、天保四年には三木家を訪れた江戸の文人画家・上杉墨水との交際も始まり、墨水が出版した『画塵』^(註7)（天保二年跋）をもったり、墨水の作品を購入したりと、父・通明同様、文人画にも関心を持ったようである。そして天保七年、通深は春琴の作品を含む三幅対、すなわち春琴の春景山水図、墨水の人物図、小田海僊の秋景山水図を購入している。^(註8) ただしこの三幅対は墨水が画の斡旋をしたものであるため、この時点で春琴と通深の間に直接的な交際があったか否かは不明である。

(2) 春琴の姫路滞在について

天保九年九月、春琴が姫路を訪れた。そのときのようにすは、「後素雜費籍」のほか、三木通深の大庄屋としての職務日記である「諸事控四番」（大庄屋三木家文書）、および浦上春琴が養子の紀一郎に宛てた書簡（浦上家伝来資料）等によって明らかになる。

天保九年九月六日、春琴は京都を出発し、九月八日に姫路に到着した。春琴が到着した当日、春琴来訪の旨を通深に伝え、姫路へ来るようにと促した人物こそ、下田桂屋であった。

通深は摂津国西宮の親戚方にて保養する予定であったが、春琴が姫路を訪れたことを知ると西宮行きを延期し、九月一〇日に姫路へ赴いた。^(註9) そして春琴への入門の祝儀を支払い、春琴が滞在している善導寺に通いながら、約二週間、姫路に滞在した。春琴は善導寺のほかにも姫路でいくつかの逗留先を

転々として絵画の制作や指導にあたったようである。^(註10)

九月一二日の夕方には下田桂屋の自宅で春琴への饗応があった。^(註11) 春琴の門人である伊賀上野の筒井鹿坪、春琴と同宿していた大坂の篆刻家、良山堂・阿部良平が同席し、通深、桂屋をはじめとする姫路の雅人たちがもてなした。ところで通深はこの姫路来訪以前から、姫路に出てきたときには自身が描いた詩書画を見せるようにと、姫路藩元家老の河合寸翁に言われていた。この寸翁の言づてを預かり、通深に伝えたのも桂屋であった。そこで九月一日、春琴、通深、桂屋は、寸翁の屋敷を訪れて、通深が詩書画を披露し、寸翁が酒や菓子をつるまうなど、交流を楽しんだ。^(註12)

なお、通深は同月二五日辻川に一時帰宅し、その後、一〇月三日より再び姫路に滞在し、同月二日に帰宅した。この二回目の姫路来訪の詳細は不明ながら、「後素雜費籍」一〇月三日条に春琴への謝礼などが記録されることから、この滞在でも、引き続き春琴から絵画指導を受けていたのだろう。そして春琴が姫路を去った後も、通深は文通による添削指導を受けており、同家には春琴が画法を教授する内容の書状や、春琴が講評を書き入れたとみられる通深の山水図が伝来する。^(註13)

(3) その後の春琴と姫路

春琴はその後、天保一二年一〇月から一一年にかけて、岡山から京都への帰路に姫路と明石に滞在しており、このように自ら赴いて絵画の制作や指導をするなかで、姫路での支援者を増やしたようである。^(註14)

おおむね天保一二年ころから弘化二年末まで(一八四一〜四五)の記録と推定されている「諸国人名文通転致人名」(浦上家伝来資料)^(註15)は、春琴作品の受注、販売記録で、ここには姫路の人物の名もみられる。これによると、天保九年に面会した河合寸翁や三木通深、桂屋宅での饗応に参集した小寺澤

鱗介、春琴が滞在した善導寺、冒頭に紹介した「挾芳園所蔵書画展観例並姓名」に春琴とともに名を連ねる出淵青山(新八郎)のほか、多田菊屏(準平)、芹田静所といった桂屋の友人、あるいは伊奈平八郎などの姫路藩士、島琴陵の子・琴江(麟三)のような画家にまで春琴の作品の購入者が広がっていたことがうかがえる。また発注者は不明ながら、桂屋が春琴への注文の取り次ぎをすることもあったようである。^(註16)

二 姫路藩士・下田桂屋

前章では、姫路における春琴の活動を確認し、大庄屋三木家や姫路藩士たちと春琴の交流に際して、下田桂屋が彼らを結びつける役割を果たす場面もあったことを確認した。ここで桂屋がいかなる人物であるか、彼の経歴および絵画作品数点を紹介する。

(1) 桂屋の生涯

下田桂屋は名を謙、字を子牧、通称は重次郎といった。桂屋のほか、緑郷の号がある。^(註18) 三木通深との間で交わされた書簡や通深の記録には重次郎の通称で現れるため、「下田重次郎」の名で表記されることが多いが、本稿では彼の文人的な側面に光を当てるため、引き続き桂屋と呼称する。

桂屋は寛政一二年(一八〇〇)の生まれとされ、^(註19) その祖先はもとと上野国不動堂村の出身である。^(註20) その生涯については『桂屋遺稿』が断片的な手がかりとなる。^(註21) 『桂屋遺稿』は桂屋没後に刊行された彼の詩集で、一九一一年(大正八)に刊行された。天保一一年から安政七年まで(一八四〇〜六〇)の詩を収めている。詩の題は年月日のあるものとなないものがあるが、年記のあるものはすべて年代順に並んでいるため、全体としてほぼ時系列で

詩が並んでいるものとみられる。

天保一二年に酒井家の家老であった河合寸翁が没すると、翌天保一三年、寸翁が開設した私塾・仁寿山黌が廃校となった。寸翁に重用された桂屋は、寸翁の生前より仁寿山黌に関与することが多く、仁寿山黌が廃校となった後も仁寿山医学寮の留守居役を務めた。^(註22) そのため仁寿山に往来した多くの文人たちと交友をもった。たとえば『桂屋遺稿』^(註23) には、岡山の漢学者で詩人の中村巖洲^(註24)、一年余り仁寿山で教鞭を執った京都の医師・野口西里^(註25)、鳥取藩士・正牆適処^(註26)、城崎出身の文人画家・斎藤崎庵^(註27)といった名が挙げられる。

安政二年（一八五五）三月には、桂屋は河合寸翁の養嗣子・河合屏山^(註28)（良翰^{かた}）に従い、浪華に遊んだ。^(註29) この滞在は一ヶ月に及び、その間、大坂で活躍していた画家・忍頂寺静村（梅谷）とは、わずか二〇日余りであったものの、日々絵画について語り合っていたという。^(註30)

また安政三年の秋、桂屋は命を受けしばらく京都に滞在したが、その際には、年末に頼三樹三郎の家で、漢詩人の梁川星巖、文人画家の貫名海屋、日根対山らと同席し酒を飲んだり、友と保津川や鴨川を訪れたりしている。^(註31) この京都滞在は翌年の三月中旬までは続いたとみられ、年末には姫路に戻っていったようである。^(註32) そして文久二年（一八六二）、桂屋はその生涯の幕を閉じた。^(註33)

（2）桂屋の詩画

桂屋は、「古今南画要覧」（嘉永六年（一八五三）、「現古漢画名家集鑑」（安政四年（一八五七））、あるいは没後に刊行された「南宗書画品価録」（慶応二年（一八六六））といった美術番付に掲載されており、文人画家のひとりとしてその名が知られていた。そこで桂屋の画をいくつか紹介しておく。^(註34)

【1】《溪山小隱図》 天保一〇年（一八三九）

紙本淡彩 掛軸 一幅 一二八、四×三〇．三 cm
落款「保亥八月 桂屋作」



遠方の山は中空に向かって垂直にそびえ、画面左中央から右下に向かって川が流れる。川の左右は断崖で、左側の岸には建物があり、川に面した一室で一人の人物が景色を眺めている。右上に「溪山小隱」の題がある。

これ以降の作品と比べると近景と遠景のつながりが不明瞭で構成が未熟なことから、天保一〇年という時期は、桂屋が画を学び始めた比較的早い時期といえるだろう。

【2】《蘆湾月艇図》 弘化三年（一八四六）

紙本淡彩 掛軸 一幅 一一九、六×三五．四 cm
落款「蘆湾月艇 丙午冬日写於翠雨草堂 桂屋讓」



丸みを帯びた山のふもとには霧が立ち込め、霧のなかの集落に人影はない。集落の左手の雑木林には紅葉した木や落葉した木が混在し、その下には緩やかなカーブを描くようにして湾が広がる。水辺には蘆が高く茂り風に揺れている。水上に浮かぶ小舟には酒を酌み交わす三人がおり、そのうちの一人が振り仰いだ視線の先には、山際に低く浮かぶ満月が、淡い墨の隈取りで描かれる。秋の夜、波ひとつ立たない入り江の静けさと、舟上の文人たちの親密な交流のようすを描いた作品である。右上に「蘆湾月艇」の題がある。

【3】《墨竹図》弘化四年（一八四七）

絹本墨画 掛軸 一幅 一二〇・〇×四二・六cm

落款「丁未花月念五日寫并添舊製 桂屋老人」



葉が生い茂る夏の竹である。賛では、青々とした竹が炎天を遮るので暑さを知らぬと詠われる。右端と左下の丈の低い竹が右に向かって幹をしならせ、葉を右方向に翻らせており、心地よく吹き抜ける風の流れが表現されている。なお、この賛とほぼ同じ詩が「画墨竹」と題して『桂屋遺稿』に掲載されている。

【4】《水亭消暑図》嘉永六年（一八五三）

紙本淡彩 掛軸 一幅 三四・六×六一・二cm

落款「癸丑六月上浣 桂屋寫」



池大雅の作品を想起させる柔らかな輪郭線と明るい色彩で、水辺の亭が描かれる。岸辺には淡彩で蓮の花が描かれ、水上には蓮花を積んだ小舟が浮かぶ。柳の下の亭にはひとりの高士がおり、遠くの山々を眺めている。

山肌に施された淡い代赦と緑の対比が清々しい印象を与える作品である。右上に「水亭消暑」の題がある。

桂屋の画業の詳細は不明ながら、これらの作品からは、天保九年の春琴との交流のころから画を始めたと推測され、春琴が姫路を去ったのちも画の修練を続けていたことがうかがわれる。

なお、桂屋は春琴から画だけでなく詩についても指導を受けていた。『桂屋遺稿』は桂屋が春琴に一評を求めた三編の詩から始まっており、これら三編の欄外と末尾には春琴が加えた評が掲載される。末尾の評は弘化元年（一八四四）十一月二十五日のもので、その記述によると、桂屋がこの一年ほど前に春琴に依頼していたようである。

欄外の春琴のコメントは、たとえば「佳峯作奇峯如何（佳峯）は（奇峯）と作るは如何」など、詩に用いる漢字についてのアドバイスが多いが、なかには姫路での両者の交流を振り返るものもある。桂屋が「仁寿山水楼和春

琴翁韻（仁寿山水樓、春琴翁の韻に和す）と題した詩に対しては、「余寓於仁寿山回首已四年矣此聲猶在耳（余、仁寿山に寓す。回首するに已に四年。此の聲、猶ほ耳に在り。）」と、仁寿山における交流を振り返っている。

三 春琴、桂屋の吉野旅行と里井浮丘訪問

冒頭でみたように、浦上春琴は天保一四年三月二十九日に、宮川春浦、下田桂屋、出淵青山を伴って泉佐野の里井浮丘のもとに赴き、所蔵の中国絵画を観覧した。その旅の行程が、『桂屋遺稿』によって明らかになる。本章では、この旅に関して『桂屋遺稿』がもたらす情報を紹介する。

桂屋は京都にいる春琴を訪問すると約束して久しかったが、天保一四年の春、ようやくそれが叶い、ついに京都の春琴を訪ね、春琴と吉野に遊び、南紀を遊歴することができた。^(註37) 桂屋が三〇日の暇をもらい、姫路の家を出発したのは三月一〇日のことであった。^(註38) 春琴の家を訪ねると、話題は嵐山と吉野の桜のこともちきりとなったという。^(註39) 道中、河内国分では春琴の支援者で春琴から絵の指導を受けていた西尾舜齋の家^(註40)に宿をとり、吉野では後醍醐天皇の墓を訪ね、吉野川を舟で下った。^(註41)

そして春琴らはこの旅の帰路で里井浮丘を訪問した。桂屋はこのことを後年の詩のなかで回想している。

「訪対山山人酒間偶見山人所曾摸笥重光靈山図巻有感賦題其後（対山山人を訪ね、酒間、偶、山人曾て摸す所の笥重光靈山図巻を見る。感有りて賦して其の後に題す。）」

嘯昔尋花游芳山 嘯昔、花を尋ね芳山に遊ぶ
茅鞋迂路歴紀泉 茅鞋、路を迂り紀泉に歴す

泉州高士里井氏

泉州の高士里井氏

収蔵盈庫富雲烟

収蔵、庫を盈^みたし、富、雲烟

一覽欲洗吾凡目

一覽して吾が凡目を洗わんと欲す

追隨琴翁投一宿

琴翁に追隨し一宿を投ず

主人留客侑芳樽

主人、客を留め芳樽を侑^{すす}む

書画評品幾十幅

書画評品、幾十幅

當時君正示此卷

當時、君、正しく示す、此の巻を

活墨秀潤溢素絹

活墨秀潤、素絹に溢れ

壯齡君已筆生花

壯齡なる君、已に筆は花を生む

樽前半日看無倦

樽前半日、見て倦むこと無し

今日与君話旧時

今日、君と旧時を話す

十五星霜夢依稀

十五星霜、夢は依稀たり

君不見琴翁父子

君は見ず、琴翁父子を

皆仙去只看

皆仙去し只だ看る

數行墨淋漓

數行の墨淋漓たるを

人生亦是雲烟態

人生、亦是れ雲烟の態

變幻須臾明又晦

變幻須臾にして明又晦たり

執卷伝杯且尽歡

巻を執り杯を伝へ且つ歡を尽くす

醉中歎極又感慨

醉中、歎極りて又感慨

前後に掲載されている詩の年代から、これは安政四年ころの詩と考えられる。この詩は日根対山のもとを訪れた桂屋が、対山の模写による笥重光の靈山図巻^{たつじゅうこう}を見てもよおした感興を詠ったものである。それによると、かつて春琴、桂屋ら一行は吉野山の桜を見、その後、回り道をして泉州の里井浮丘を訪ねて一泊し、彼が所蔵する幾十幅もの書画を品評した。またその日、対山

が笥重光筆靈山図巻の模写を示した。それから十年以上経過し、当時見た対山の模写に再会したことから、桂屋は当時の状況と再会の感慨をその対山の模写の巻末に綴ったのである。

「挾芳園所蔵書画展観例並姓名」の三月二十九日条に記録される春琴らの書画観覧とは、まさにこの吉野行きの帰路だったことが、この詩によって明らかになる。加えて、浮丘の記録は年月日と人名のみの簡潔なものであるが、桂屋の詩からは、收藏品で満たされた蔵のようすや、主人である浮丘が客を留め、酒を勧めるという和氣藹々とした雰囲気の中で観覧したことが伝わってくる。

なお彼らが鑑賞した作品の作者として名前の挙がる笥重光は、清代初期の書画家で、画家の王翬^{おうき}、惲寿平^{うんじゅへい}と交流し、特に山水、蘭竹を得意とした。^(註46)詩では対山による模写のことを詠じており、彼らが原本を見たかは不明だが、その原本は浮丘が所蔵していたとみられる。^(註44)春琴らも、あるいはこの笥重光の原本を見たかもしれない。

四 その後の桂屋と春琴

最後に、吉野旅行以後の桂屋と春琴について触れておきたい。春琴がつけた「日省簿」(浦上家伝来資料)によれば、この吉野旅行の翌年、桂屋は春琴と数回書状のやりとりをしているようである。^(註45)前章でみた詩稿への一評を桂屋が依頼したのはこの時期であろう。そしてその翌々年、弘化三年の五月二日に春琴は没する。『桂屋遺稿』には、春琴を追悼する詩も収められる。

「追悼春琴翁(春琴翁を追悼す)」

芳山花 鴨川月 芳山の花 鴨川の月

憶曾相携共彷徨 曾て相携え共に彷徨せしを憶ふ
踏月閑話有聲画 月を踏み閑話す、有聲の画
賞花同宿白雲郷 花を賞し同宿す、白雲の郷
花月依然春又好 花月依然たりて春は又好まし
断絃人去夢茫茫 絃を断ち人は去り夢茫茫

桂屋にとつて、京都や吉野で春琴と過ごした思い出は、春琴がこの世を去った後も、懐かしく思い出されるものであったことがうかがわれる。『桂屋遺稿』の掲載順から安政六年ころと推定される年の九月二十四日、桂屋はかつてともに春琴をもてなした三木通深の家に赴き、同家に春琴が描いた秋景山水図が掛けられているのを見て詩を作った。

「九月念四同兒復甥惇辻川宿三木氏壁上見春琴翁画幅因得此作(九月念四、兒復、甥惇と共に辻川宿三木氏の壁上に春琴翁の画幅を見る。因りて此の作を得る。)」

秋晴十里訪村居	秋晴十里、村居を訪ぬ
忽看琴翁旧画図	忽ち看る、琴翁の旧画図を
健筆縦横墨猶湿	健筆縦横、墨は猶ほ湿るがごとし
山為北苑樹倪迂	山は北苑たり、樹は倪迂
峰巒重疊山露骨	峰巒、重疊なるも山は骨を露わす
泉聲纔存一溪枯	泉聲、纔かに存するも一溪枯る
巖下有橋誰来往	巖下、橋有るも誰か来往せん
雲間有寺塔影孤	雲間、寺有るも塔影孤たり
紅樹扶疎秋滿幅	紅樹、疎を扶け、秋、幅を満たす
恰似今日訪君途	恰も今日、君を訪ぬる途に似たり

摩娑終日不釋手 摩娑すること終日、手を釋かず

為題小詩撚吟鬚 小詩を題する為に吟鬚を撚る

桂屋とともに姫路で春琴を響応した三木通深は、安政四年、すでに三四歳の若さで没している。桂屋の訪問を受けて春琴の画を掛けたのは、三木家のなかでも春琴、桂屋と通深の交流を知る人物のはからいであつたのかもしれない。そして春琴が遺した作品を見た桂屋は、三木家の人々とともに、春琴や通深の思い出話に花を咲かせたことであろう。春琴を核として姫路の人々の間に広がった文人画を愛好する気風は、彼が姫路を去り、没した後も、桂屋をはじめとする地元の人々の心に宿り続けたといえる。

おわりに

里井浮丘の「挾芳園所蔵書画展観例並姓名」を起点として、姫路藩士・下田桂屋と浦上春琴の交流のようすを紹介した。桂屋は、ときに春琴の絵画を購入する顧客、あるいは春琴を慕う弟子として、またときに春琴の作品を享受する姫路の人びとと春琴の間をとりもつ仲介者として、姫路の文人文化に重要な役割を果たした存在であつたといえるだろう。

【註】

- (1) 藪田貫監修『新修泉佐野市史 第二巻 通史編近世 第三巻 通史編近代 元代』（泉佐野市史編さん委員会、二〇〇九年）、北脇洋子『幕末泉州の文化サロン―里井浮丘と京坂文化人―』（展望社、二〇一六年）。
- (2) このときのようすは、富田博之「周之變《溪澗松濤図》をめぐる人々―里井浮丘を中心に―」（『泉屋博古館紀要』三六号、二〇二〇年）に詳しい。
- (3) 守安収「浦上春琴の生涯」『浦上玉堂関係叢書 浦上家の歴史』浦上家史編纂委員会、二〇二一年。
- (4) 尾島治「浦上春琴の作画と販売文人画家として生きた文人―『浦上玉堂関係叢書 浦上玉堂父子の藝術』浦上家史編纂委員会、二〇二一年
- (5) 山崎善弘「三木家と姫路藩主・元家老との文化的交流について」『平成二二年度活動報告書』（二〇二一年三月、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター）、尾島氏前掲註4論文、および『福岡町史 第二巻 本文編Ⅱ』（福岡町史編集専門委員会、一九九五年）一五四―一五六頁。
- (6) 同家に伝来する絵画とその内容については、奥平俊六「大庄屋三木家の絵画」（『懷徳堂センター報 二〇〇七』、二〇〇七年）および高嶋藍「三木家絵画に見る江戸時代の文人世界―三木家所蔵画幅画賛釈文」（『懷徳堂センター報 二〇〇八』、二〇〇八年）に詳しい。
- (7) 「後素雑費籍」天保四年四月二二日条。
- (8) 「後素雑費籍」天保七年正月二六日条。
- (9) 山崎氏前掲註5論文一五、一六頁。
- (10) 尾島氏前掲註4論文五一、五一六頁。
- (11) 「後素雑費籍」天保九年九月一二日条。
- (12) 山崎氏前掲註5論文、一七、一八頁。
- (13) 『民俗学のふるさと福岡―幼き國男に刻まれた福岡文化―』（福岡町立神崎郡歴史

民俗資料館、二〇一一年）所載「山水画」。長谷川幸子氏の「」教示による。

(14) 尾島氏前掲註4論文、五一六頁。

(15) 『浦上玉堂関係叢書 資料編Ⅱ』浦上家史編纂委員会、二〇二〇年）所載。

(16) いずれも次の章で紹介する『桂屋遺稿』に登場する。

(17) 「紙本□幅 山水 夏山暈翠圖 姫路 下田重次郎 取次」と記載される。

(18) 穂積勝次郎『姫路藩の人物群像』（一九六八年）、三三八頁。

(19) 『琴陵・琴江・桂屋・鉄兜・轟々 郷土の五人』（姫路 郷土書画研究会、一九八〇年）

(20) 『桂屋遺稿』に次のように題する詩がある。「上州不動堂村徳澤者余祖先之所出 此行乞暇赴之宿両衛家（上州不動堂村の徳澤は余が祖先の出づる所なり。此の行、暇を乞ひ之に赴き両衛家に宿す。）」

(21) なおすでに『兵庫を歩いた近世の画家』展覧会図録（兵庫県立歴史博物館、一九八三年）にて、『桂屋遺稿』にもとづいて桂屋の経歴や交友関係が簡潔に紹介されている。

(22) 前掲註一八文献、九四〇九五頁および三三八頁。

(23) 『桂屋遺稿』に次のように題する詩がある。「仁寿山莊邂逅備前中邨嚴洲（仁寿山莊、備前中邨嚴洲に邂逅す）」、「再遇中村嚴洲（中村嚴洲に再遇す）」。嚴洲は岡山の漢学者で詩人。浦上春琴の『薔薇小禽図』に賛をしている（『浦上玉堂と春琴・秋琴 父子の藝術』展覧会図録（岡山県立美術館・千葉市美術館、二〇一六年）の作品リストNo.二〇七）。

(24) 『桂屋遺稿』に次のように題する詩がある。「次野口西里韻送其還京師西里善医来寓於仁寿莊医学寮教習諸生者歳余（野口西里の韻に次ぎ、其の京師に還るを送る。西里は医を善くし仁寿莊医学寮に来寓す。諸生を教習すること歳余。）」。なお『西里遺稿詩文集』（嘉永五年（一八五二）刊）にも「贈下田桂屋（仁寿山即事）の詩があり、両者の交流がうかがわれる。

(25) 『桂屋遺稿』に次のように題する詩がある。「乙巳之春正牆適所欲帰省索余画因

写帰途趣并題為贖余Y髻随家翁過因州距今殆三十年山容水体不知能彷彿否（乙巳の春、正牆適所帰省せんと欲し余に画を索む。因りて帰途の趣を写し、並びに題して贖と為す。余、Y髻して家翁に随い因州を過りしは、今を距つること殆ど三十年、山容水体、知らず、能く彷彿するや否や。）」

(26) 『桂屋遺稿』に「送崎庵西游（崎庵の西游を送る）」と題する詩がある。崎庵は嘉永二〇三年（一八四九）五〇に仁寿山を訪れている。

(27) 『桂屋遺稿』に「乙卯三月陪屏山大夫遊浪華（乙卯三月、屏山大夫に陪し浪華に遊ぶ）」と題する詩がある。

(28) 『桂屋遺稿』の「発浪華赴有馬過四十八盤」と題する詩の一句目に「浪華淹留一月強」とある。

(29) 『桂屋遺稿』の「送梅谷画史之江州（梅谷画史江州に之くを送る）」と題する詩の一句目、二句目に「客裏交游纔兩旬 画図日日話伝神（客裏の交游、纔かに兩旬 画図、日日伝神を話す）」とある。

(30) 『桂屋遺稿』に「秋夜聞雁余時蒙役于京師之命（秋夜雁を聞く。余、時に京師に役するの命を蒙る）」と題する詩がある。

(31) 『桂屋遺稿』に次のように題する詩がある。「歳晚同星嚴立齋三樹対山松島石斎 飲於三樹之月波楼（歳晚、星嚴、立齋、三樹、対山、松島、石斎と共に三樹の月波楼において飲む）」、「仲秋望前一日海屋翁見寄書追想去歳余客于京師此夜同翁及諸子飲于三樹月波楼之事賦寄（仲秋望前一日、海屋翁書を寄せられ、去歳、余が京師に客たりしを追想す。此の夜、翁及び諸子と共に三樹の月波楼において飲むの事、賦して寄す。）」

(32) 『桂屋遺稿』に次のように題する詩がある。「同諸友買舟湖嵐峽到於保津舟中所見勝概得古風四首（諸友と共に舟を買い、嵐峽を溯り保津に到る。舟中見る所の勝概、古風四首を得。）」、「夏夜鴨川即事」

(33) 『桂屋遺稿』に次のように題する詩がある。「三月十四日兒復甥惇訪余于京師寓

居（後略）（三月十四日、兒復、甥惇、余を京師寓居に訪ぬ。（後略）」

(34)『桂屋遺稿』に次のように題する詩がある。「歳晚奉訪屏山大夫梅丘之隱栖（歳晚、屏山大夫の梅丘の隱栖を奉訪す）」

(35) いずれも瀨木慎一『江戸・明治・大正・昭和の美術番付集成―書画の価格変遷 二〇〇年―』（里文出版、二〇〇〇年）に収録される。

(36) なお下田桂屋を含む姫路ゆかりの画家の作品については前掲註一九文献にて紹介されている。本稿で紹介する〔2〕～〔4〕も、モノクロ画像で掲載される。

(37)『桂屋遺稿』に以下のように題する詩がある。「余約訪春琴翁者久矣塵務阻撓未果今茲癸卯之春游京師宿約始遂與翁遊芳野歷南紀而帰旅中得七絶（余、春琴翁を訪ぬと約すること久し。塵務阻撓し未だ果たさず。今茲に癸卯の春、京師に遊び、宿約、始めて遂に翁と芳野に遊び、南紀を歴して帰る。旅中七絶を得。）」

(38)『桂屋遺稿』の「三月十日発家（三月十日家を発つ）」と題する詩に次のようにある。〈君恩卅日許閑游 ト得花期向帝州 妻結茅鞋兒奉杖 笑中亦自有離愁（君恩卅日、閑游を許す トして花期を得、帝州に向かう 妻は茅鞋を結い兒は杖を奉る 笑中、亦た自ら離愁有り）〉

(39)『桂屋遺稿』の「寓春琴家（春琴の家に寓す）」と題する詩に次のようにある。〈脱却旅装如返家 風爐且淪霍心茶 寒喧舒了無他語 惟問嵐山芳野花（旅装を脱却し家に返るごとし 風爐且淪霍心茶 寒喧^や舒^{ゆる}やかに了^{おわ}り他語無し 惟だ問ふ嵐山と芳野の花を）〉

(40)「挾芳園所蔵書画展観例並姓名」弘化三年に「西尾舜齋 名勝宣字子有通称兵之助 同（筆者註…河内國分駅）郷人 春琴門人」とある。また「諸国人名文通転致人名」にも「同（筆者註…河内國分）西尾兵之助 瞬齋」と記載され、地方における春琴の主要な支援者の一人であった。

(41)『桂屋遺稿』に以下のように題する詩がある。「到河内國分駅宿西尾舜齋宅此夜雨雪春寒殊甚曉発得此作（河内國分駅宿西尾舜齋宅に到る。此の夜、雨雪春寒殊

に甚し。曉に発し此の作を得。）」

(42)『桂屋遺稿』には、註38から41までの詩に続いて「芳野」「帝陵」「下芳野川舟中」と題する詩がある。

(43)『新潮世界美術辞典』新潮社、一九八五年

(44) 春琴の来訪よりやや下る時期ではあるが、浮丘の日記『日省簿』（泉佐野市立歴史館いずみさの蔵）に、笹重光の画巻を貸し出した記録が残る。それによると、安政五年一〇月一日より安政六年三月二三日まで中墨水に貸し出し、文久元年三月一八日より晦日まで高山保次郎（浮丘の次男）に貸し出している。

(45)『浦上玉堂関係叢書 資料編Ⅱ』（前掲註一五文献）所載。天保一五年一月二九日条、四月七日条、一〇月七日条。

本稿執筆にあたり、中島利一郎様、中島由佳子様、松井萌様（泉佐野市立歴史館いずみさの）、東原和代様（泉佐野市教育委員会 文化財保護課）、長谷川幸子様（福岡町教育委員会 社会教育課）には、資料閲覧でお世話になり、また新たな情報をいただきました。調査に際しては、藪田貫館長、竹内信学芸員に協力いただきました。記して感謝申し上げます。